

共感的感情喚起に及ぼす他者感情理解の役割

— 表情および状況手掛かりのVTR刺激を用いて —

笹 屋 里 絵

【問題と目的】

本研究では、他者の感情をどのように理解すれば、どのような共感が生じるのか、ということをも明らかにするために、子どもに対してVTR刺激を呈示して実験的に調べた。

共感とは向社会的行動や道徳的な行動を動機づけるもので、子どもの対人関係の発達において重要な役割を果たしている(Eisenberg, 1986; Hoffman, 1984)。共感が生じるには、まず相手の感情を適切に理解しなければならない。我々は他者の感情を推測するときには、相手の表情だけでなく相手がおかれている状況も手掛かりとして用いている(Gnepp, 1982)が、表情や状況手掛かりを用いた感情理解が共感の成立過程でどのような役割を果たしているのかは明らかとなっていない。また、最近、共感には質的に異なる2つのタイプがあることが分かってきた(Eisenberg, et al., 1989; Staub, 1987)。すなわち、1つは「相手と同一あるいは類似の感情が喚起する場合(例えば、悲しんでいる人を見て、自分も悲しくなったり不安になったりする)」で、もう1つは「相手と必ずしも同一の感情ではないが相手を思いやるような感情が喚起する場合(例えば、悲しんでいる相手に対してかわいそうと思う)」であり、後者の方が向社会的行動を動機づける高次の共感であるとされている。しかし、これら2つの共感が発達のにも異なるものなのか、また、これらの共感の違いがどうして生じるのかに関しては分かっていない。

そこで、本研究では前者のタイプの共感を「一次共感」、後者を「二次共感」とし、「相手が置かれている状況を正確に把握して相手の感情をより深く理解することが、高次の共感、つまり「二次共感」の生起につながる」という仮説をたてた。そして、この仮説を検証するために、手掛かりを与える条件を操作したVTR刺激をさまざまな学年の子どもに呈示し、刺激中の主人公の感情を推測させたり、刺激を見たときの被験者の気持ちを述べさせることによって、質的に異なる2つの共感の生起が表情および状況手掛かりからの感情理解とどのような関係があるのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

被験者：4歳、5歳、小1、小3、小5、中1の男女そ

れぞれ10名、計120名を対象とした。また、コントロールとして大学生の男女各10名にも同様の実験を行なった。
実験材料：タレント養成学校で演劇の訓練を受けた2人の児童(男児小4、女児小3)が表出した表情アップの写真(それぞれ喜び、悲しみ、怒りの表情、計6刺激)と、彼らが演じたVTR(喜び、悲しみ、怒りの各感情と関係のあるテーマそれぞれ3話ずつ、計9話)を刺激として用いた。VTRは男子用、女子用それぞれ別々に作成した。VTRの各ストーリーは、約1分の物語の部分とその結末として主人公のアップの部分から編成された。これらの刺激から1)「表情課題」(表情写真のみ)、2)「状況課題」(物語のみのVTR刺激)、および3)「状況+表情課題」(物語とその結末としての主人公の表情アップからなるVTR刺激)の3つの課題を作成した。なお、表情+状況課題では物語と表情の組み合わせにより、物語に対して適切と考えられる表情が呈示される「一致条件(説明の便宜上のため以下、一致課題)」と、不適切と考えられる表情が呈示される「矛盾条件(以下、矛盾課題)」を設定した。

実験手続き：実験は、VTR装置を設置した部屋において個別に実施。被験者に各課題の刺激を呈示した後、a)「〇〇君(〇〇ちゃん、主人公の名前)は、どういう気持ちですか」、b)「どうしてそう思いましたか」、c)「これを見て、〇〇君(〇〇ちゃん、被験児の名前)はどういう気持ちになりましたか」という質問を行い、口頭で答えさせた。なお、表情課題のみa)とc)の質問を行い、それ以外の課題では全ての質問を行なった。各課題において、写真刺激の呈示順序、状況課題、一致および矛盾課題でのVTR刺激の呈示順序、および一致課題と矛盾課題における物語と表情の組み合わせは被験者ごとに入れ替えてカウンターバランスをとった。実験の所要時間は一人当たり約20分であった。

【結果と考察】

実験の結果得られた被験者の反応を「他者感情理解」と「共感的感情の喚起」に分けて検討する。

1) 他者感情理解

表情および状況手掛かりを単独で呈示した課題(表情課題、状況課題)における感情理解能力の発達に関しては、調べたうち最も若い学年である4歳児は状況課題で

ほとんど正解できなかったのに対し、表情課題ではある程度答えることができていた。それ以降の学年では、状況課題の成績は5歳から小3にかけて急激に高くなるのに対し、表情課題の成績は徐々にしか高くなっていない。このことから、表情認知能力はわりと早期から発達しているが、状況把握力は5歳、小1にならないと発達してこないのではないかと考えられる。

次に、表情と状況の手掛かりが矛盾している場合、どちらの手掛かりを重視して相手の感情を理解しているのかを見るために矛盾課題での被験者の反応を調べてみると、4、5歳では主に表情に依存した解答が目立ったのに対し、小3から小5にかけては状況に依存した解答をする頻度が増加した。また、小3以降の女子や中1以降の男子の過半数が、どちらか一方の手掛かりを無視するのでなく、両方の手掛かりがうまくつながるように手掛かりを統合的に用いることができるようになった（例えば、お誕生日にケーキをもらって主人公が悲しんでいる刺激に対して、『チョコレートケーキを買ってきて』って頼んでいたのにイチゴケーキだったから悲しんでいる」と答える場合）。おそらく、状況把握力は手掛かりを統合的に用いて他者感情を推測することにも関係していると考えられるが、表情や状況課題の成績に違いのない被験者でも、状況だけを重視する場合と統合的に答える場合があった。このことに関しては、なぜそのような違いが生じたかは本研究の結果だけでは明らかにならなかった。

2) 共感的感情の喚起

先行研究（浅川と松岡，1987：Mehrabian et al., 1975）から、共感の生起頻度は年齢とともに増加していくが、ある時期（小学校中学年あるいは高学年）から減少しはじめるとされている。本研究でも一致条件における一次共感と二次共感を含めた共感全体の生起頻度を調べると、小学校5年までは増加していくがそれ以降は減少していくという傾向が見られた。そこで、共感全体を一次、二次に分類して見てみると、一次共感が小5をピークに山型の分布をするのに対し、二次共感の小1以降、

徐々に増加していった。このように、二つのタイプの共感は、発達の異なる経過を辿り、一次より二次の方が、後の学年で見られることが分かった。このことから、共感の発達の变化は、2つのタイプに分類して見ないと正確に把握できないといえる。

次に、一次、二次、二つのタイプの共感が、それぞれの課題でよく生じるかを調べてみると、一次共感は表情課題を含めたあらゆる課題でしばしば生じたのに対し、二次共感は状況課題や一致課題で生起頻度が高く、表情課題ではほとんど見られなかった。よって、二次共感が成立するためには状況手掛かりの存在が重要であると考えられる。

【全体的考察】

表情および状況手掛かりからの感情理解も共感的感情の生起頻度も年齢とともに高くなることから、共感の生起には相手の感情を理解することが必要であると考えられる。しかし、感情理解の方は年齢とともに正確になるのに対して、共感の方はある時期から生起しにくくなる。これは、低学年のときは、主に一次共感が生起するのに対して、高学年になるにつれて、そのようなタイプの共感あまり生起しなくなり、より高次の二次共感が生じるようになるためである。一次共感は表情手掛かりのみでもある程度生起するが、二次共感は状況手掛かりがないと生じにくい。つまり、高学年になると高次の共感が生起するようになるが、その共感が生起するには状況手掛かりを用いて正確だけでなくより深く相手の感情を理解する必要があるので、共感は簡単には生起しなくなると考えられる。

【結論】

相手がおかれている状況を正確に把握することが、「二次共感」つまり「相手を思いやる行動につながるような高次の共感」を生じさせること、そしてそのような高次の共感発達は状況把握力の発達と関連して、小1以降、徐々に発達していくことが明らかとなった。